

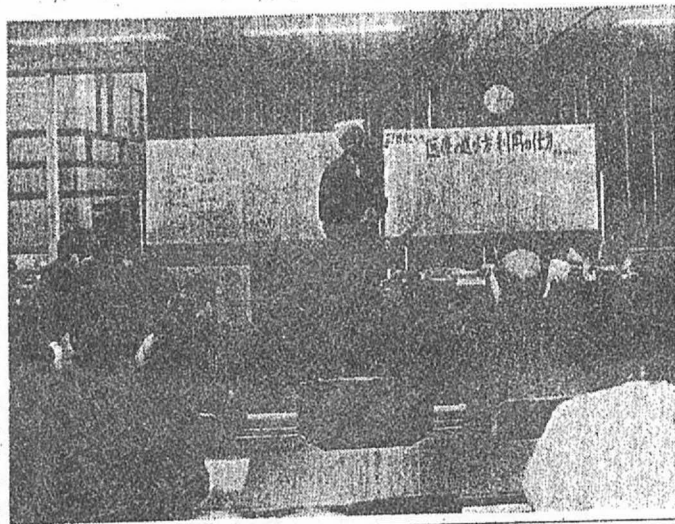
平成5年(1993年)4月20日(火曜日)

医療の選び方 利用の仕方

自分や家族が病気になった時、どのように医療機関を選び、どう利用したら一番良い結果が得られるのか。これはだれもが知りたいことです。自らが脳内出血で緊急入院し、退院したばかりという「市民と専門家のための健康・医療ガイドセンター」代表で内科・神経科医の松原雄一さんが、「21世紀への医療の選び方、利用の仕方」という講演を行いました。

医師が入院体験を語る

自分の状態をメモし生きること



松原さんが倒れたのは、仕事中に左耳の上が痛み出す昨年12月9日のこと。夕方、吐き気を催しました。

大した痛みではありませんでしたが、脳の病気を疑ったのは、2カ月ほど前から徴候があったからです。

救急車はためらわずに利用を

突然、目まいがして意識を失ったり、けいれんが起ったり、家族の名前や直前の行動が思い出せなくなったり…。しかしCT(コンピュータ断層撮影)検査では異常が見つかりませんでした。

こんなことがあったので、頭痛と吐き気を感じた時、松原さんはすぐに救急車を呼ぶとともに、近くの大学病院の脳外科に連絡をして、診察を要請しました。救急車には自分で歩いて乗り込むほど元気でしたが、車内で意識を失いました。「歩ける状態で救急車を呼んだら、病院で文句を言われるかもしれないし、僕自身も病院勤務時代に不愉快に感じたことがあります。が、今回の体験で、少々は無駄があっても、救急車は

失語、難聴、視野狭さくなど、後遺症と戦いながら医療問題に取り組む松原医師

ためらわずに使ってほしいと思います。あの時、救急車を呼んでいなかったら、きっと、今、ここにはいませんね。」

脳は左側頭葉に6センチ以上の出血がある状態で、緊急手術となりました。そしてわかったのは、悪性の脳腫瘍(しゅよう)だということ。2回目の手術が必要だということになります。

知り合いの医師看護婦にアドバイス

「おかしいなと思った時に、医師なのにフィリリアとマリリアを間違えたし、両親や弟の誕生日がわからなくなった」と訴えても、精密検査で異常がなければ、そういうことはよくあることと片づけられてしまふんですね。それを信じて体の異常を無視していたら、やはり命はなかったでしょうね。」

ではどうしたらいいか。松原さんのアドバイスは「自分の体の状態をメモし、ながら生きる」と。そして「知り合いの医師や看護婦にアドバイスを求めてみる」と。「これからは作るべき制度として、専門医を第3者の的に見れる情報と専門知識を持った「プロの育成」を挙げました。これが健康・医療ガイドセンターの今後の課題になりそうです。

情報を得ると同時に、これからは紹介状も必要になってきます。なるべく自宅に近く、しかも症状にあわせていい病院を選びます。

入院したら、医師との話し合いを十分にするのが大切。しかし専門的知識がない素人には、何を質問していいかわからないことが多々あるので、医師側の一層の努力が求められるようになっていくでしょう。

「病院のルールも再考すべきです。放射線治療で全く食欲がない時に、決められた食事をきちんと食べることができません。その時、夕食にほんの少しのアルコールを飲むことが、なぜいけないのでしょうか。リスンの大きいタバコは喫煙所で喫えるのに、食事だってある程度、自由に食べたいのではないかとも思います。」

「自分が死と向き合っている松原医師の言葉は、説得力に富んだ内容の講演になりました。」